

エコロジカルな回心 —すべてのいのちを守るため—

八王子修道院

教皇フランシスコが回勅『ラウダート・シ』を発表し、「エコロジカルな回心」を提唱して以来、「エコロジカルな回心」は、共同体をあげて取り組むテーマの一つとなっています。

『ラウダート・シ』を読み、『エコロジカルな回心』について深める前は、「エコロジー」と言えば、自然環境に関することという理解しかありませんでした。しかし、互いに話し合いを重ね、『ラウダート・シ』におけるエコロジーは、自然との関わりだけでなく、人間の持つあらゆる側面を排除しないという全人的な意味と、人間同士の関わり、神との関わりの全部を含む「総合的なエコロジー」であると理解するようになると、これまでの取り組みは継続しつつ、これから取り組みたいことも見えてきました。

また、コロナ禍の中にあつたこの3年間は、特にエコロジカルな回心を深めるよい機会であつたと思います。そこで、八王子の共同体は、3月の静修でコロナ禍において自分の祈りや神との関わりがどのように変化したのか、コロナ禍を通して見えてきた恵みを個人で振り返りました。そこで、以下に姉妹たちがコロナ禍において受けた恵み、気づきの一部を分かち合います。

- ・神のあわれみの中で深い祈りを捧げるよう招かれているのを感じる。
- ・コロナ禍の中でこれほど個人で祈ることの集中力が求められたのは初めての体験だった。
- ・コロナ禍の前まで共同の祈りに参加していれば祈りの務めを果たしているように錯覚していたことに気づかされた。
- ・常に自分と関わろうとしてくださる神様の働きかけに救われたことが何度もあつた。祈りは、その意味で神様に心を向ける最も大切な行為であり、自分が救っていただくために欠かすことができないと感じている。
- ・人と関わるることについて自分と相手の一対一でなく、神様を入れての「三角」の関係であることの大切さを知ったように思う。
- ・人との距離ができてしまいがちな中、人との関係だけでなく、あらゆることにつながりを見出そうとするようになった。
- ・人間は何でも自分の思い通りに振る舞える存在なのではなく、単に被造物の一つでしかなく、困難の中で自分にできることをやりながらも、神に頼るしかできない存在だと実感した。
- ・マスクをしていても声を出し、共に主を賛美し、祈る共同体でありたい。
- ・一番の恵みは沈黙する時が多かつたこと。静かな雰囲気味わう生活の中で目覚めて神の現存を探す生き方ができた。

- ・日常の当たり前の穏やかさの中で神と出会えている喜びを味わえた。
- ・コロナ禍のために居室での黙想であったことは、気を散らさず、集中してありのままの自分と対決し、祈ることができた。
- ・この3年間は、コロナ禍と同時にウクライナでの戦争開始など、祈りの対象は神様の創造の業である世界に目が向けられる必要な期間だった。
- ・人との関係も、話をしなくても周りをよく見て心配りに励むと、主がお喜びになると確信している。
- ・人様からのお祈りの依頼も多く、福音宣教へと導いてくださる聖霊の働きは私たちの心を変えてくださった。
- ・神がこの人類に託してこの地球に人類を住まわせ、責任をもって地球上の自然を見守っていくようにと願い求めておられることを感じる。
- ・大自然との関係を感じて神に感謝することが増えた気がする。

このようにコロナ禍においてこれまで当たり前できていたことが制限され、不自由さを感じながらも私たちは恵みの時を過ごしていたことに気づかされ、これまでになかった新たな視点を持つことができたように思います。5月の連休後からコロナの扱いが新たな段階に入りましたが、これからも、神、自然、他者、自分との関わりを大切にし、これらの調和のために祈りのうちに励んでいきたいと思っています。